

演題名： 花粉—食物アレルギー症候群の疫学と診断

○大澤陽子（福井赤十字病院耳鼻咽喉科）、藤枝重治（福井大学医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科学）

1) 本邦の花粉—食物アレルギー症候群

口腔アレルギー症候群（oral allergy syndrome: OAS）は、食物抗原が誘因となり IgE 依存性に口腔粘膜を中心に症状を惹起する I 型アレルギー疾患群である。ほとんどが口腔症状のみを認めるが、眼・鼻症状・皮疹を合併し、まれにショック症状を認める症例も報告されている。このようなアナフィラキシー症例は耳鼻咽喉科を受診することはまれで、おもに皮膚科や内科（アレルギー科）を受診しているため、耳鼻咽喉科医の認識は低い。

OAS の多くが花粉—食物アレルギー症候群（pollen-food allergy syndrome: PFAS）であり、本邦では、シラカンバ花粉症の患者に OAS 患者が多いと言われている。海外では、カバノキ科の樹木花粉やイネ科・キク科の雑草花粉と各種食物の関連が報告されており、これらの花粉症患者の 60—90% に OAS が認められるとされている。PFAS の原因花粉の感作率は、その樹木・雑草の生息地が地域や緯度により大きく異なることから、地域差が大きいとも言われている

2) 花粉—食物アレルギー症候群の診断

PFAS は以前から認識されていた概念であったが、原因食物を特定する場合、食物抗原の皮膚テストや血清中の食物抗原 IgE が証明できない症例があることが知られていた。そのため、慣例として血清中に花粉抗原 IgE が証明され、花粉と関連の示唆されている食物の負荷テストが陽性であれば PFAS として取り扱ってきた経緯がある。古くは、食物蛋白の抗原性が Immuno CAP の反応中に消失するため食物抗原 IgE が測定できないのではないかとされていた時代もあったが、アレルゲンコンポーネント測定が簡便に実施可能となった現在この考えは否定的である。pan-allergen の交差反応・交差感作が PFAS の根源に有り、多くは花粉抗原感作から由来する食物抗原への交差感作（反応）によるアレルギー反応が介在している。従って、PFAS の誘因食物の IgE 感作は pan-allergen に相当する部分のアレルゲンコンポーネントに限局されている可能性が高く、食物蛋白粗抗原 IgE を測定しても陰性となっていたと推測される。

今回、我々の研究グループが最近行った福井県内の病院・診療所の耳鼻咽喉科外来を受診した患者を対象とした約 6800 名のアンケートによる疫学調査の結果、および口腔症状を有する患者約 250 名を対象とした花粉抗原と食物抗原の PR-10 蛋白に相当するアレルゲンコンポーネント IgE を測定した結果を報告する。